



開催されるパーティーに集まるのはアンリの親戚や親しい友人たちだが、キーマンは精神科医でパリにある大病院の部局長のピエール・コリエ（ランベール・ウィルソン）。自由恋愛の国フランスらしく、クレール（アンヌ・コンシニ）という妻をもつピエールは画家で彫刻家の現愛人エステル・バシュマン（ヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ）と堂々と付き合い合っているらしい。しかも、アンリの妻であるエリアーヌはピエールの元愛人。さらに、エリアーヌがびっくりゲストとして呼んだのが、ピエールのかつての恋人でイタリア人女優のレア・マントヴァニ（カテリーナ・ムリーノ）。このようにアンリとエリアーヌ夫妻主催のパーティーには、ピエールの妻、現愛人、元愛人、かつての恋人と4人の女が勢ぞろいしたのだから、何かが起こらない方が不思議。

映画はそんなピエールをめぐる女たちの人間関係を紹介していくが、さらにややこしいのがピエールの現愛人エステルには彼女を想っている若き作家のフィリップ・レジェ（マチュー・ドゥミ）がいるうえ、このフィリップを靴屋の販売員のマルト（セリーヌ・サレット）が想っていること。さらにアンリの家には、アンリの姪で小生意気なクロエ（アガット・ボニゼール）もいる。パジェス家のパーティーの参加者は以上合計9名だが、レアの忠実な運転手ミシェル（ダニー・ブリアン）も熱い視線をレアに向けているようだから、ひょっとして・・・？

## フランスでの銃の規制は？

日本は銃砲刀剣類所持等取締法による規制が厳しいから、銃や刀を持っているのはヤクザしかいない（？）。しかし、フランスの上院議員のアンリは狩猟が趣味で、銃器の愛好家として有名らしい。上院議員だからこれだけの大邸宅を持つ大金持ちだとしたら、「政治とカネ」問題で大騒動をくり返している日本と同じように大問題だが、鳩山由紀夫一家と同じように生まれながら大金持ちなら話は別。それはさておき、アンリが集めている銃器の種類と量はハンパではないうえ、ゴルフの打ちっ放し場を少し小さくしたような銃の練習場まであることにビックリ。フランスでの銃の規制はどうなっているの？ 弁護士の私としてはそんなことに興味を持ったが、もちろん本作のポイントはそんなものではない。ある日プールサイドでピエールの死体が発見されたから大変。

倒れたピエールの傍らには現愛人のエステルと妻のクレールがうずくまっていたが、ピエール死亡の直前にはピエールとかつての恋人レアとの熱いセックスもあったから、まず第1に疑いの目が妻のクレールに向かったのは当然だ。グランジュ刑事（モーリス・ベニシュー）はクレールを容疑者として逮捕したが、エリアーヌは「10年間誰とでも浮気していた夫を、妻のクレールが今さら殺すわけがない」と憤慨。ヘンな理屈だが、なるほど、それもごもっともだ。そして、解剖結果からピエールを撃った銃はクレールが手にしていた38口径のリボルバーではなく、9ミリのオートマチックだと判明したからクレールは釈放され、捜査は振り出しに戻ることに・・・。

## 第2の犠牲者は？あっと驚く人間ドラマとは？

男と女の別れはどこにでもある。しかし、別れた男と女の再会はまれ。本作におけるピエールとレアの再会はエリアーナが仕組んだ趣向だが、ピエールの元愛人だったエリアーナがなぜそんな行動を？男の私にはそもそもそれがよくわからないが、パジェス家のパーティーに招かれたことによってピエールとの再会を果たしたレアの色気ムンムのピエールへの迫り方に私はビックリ！これではピエールが落ちるのも当然だが、運転手のミシェルにそんな現場を目撃されても堂々としているレアの度胸に私はビックリ。

5人の男たちがアイドル女優・如月ミキの死亡原因をめぐる怒濤の推理を展開した『キサラギ』(07年)は、邦画だったから5人の男の特徴がすぐに理解できた。しかし本作では、パーティーに参加した9人の人間関係(男女関係)を理解することがそもそも難しい。6人の女性のうち一番目立った顔で輝いている女優のレアはすぐに識別できるが、他の女性については少し困難？しかし、第2の犠牲者になったのはこのレア。しかも、今回は銃ではなく自宅で喉を掻っ切られた状態で死体で発見されたから大変だ。さあ、グランジュ刑事は、そしてあなたはその犯人についてどんな怒濤の推理を？

本作の原題は『LE GRAND ALIBI』。その直訳は「大きいアリバイ」だが、その意味はイマイチ不明？そうすると、『華麗なるアリバイ』はいかにもピッタリな邦題？すべてが謎のまま終わるのかと一瞬錯覚した後、ラスト約20分で明らかにされるあっと驚く人間ドラマとは？それはあなた自身の目でしっかりと。

2010(平成22)年6月8日記

### 大阪地検特捜部はどこへ？

大阪地検特捜部の前田恒彦元検事による押収資料改ざん事件と、前特捜部長大坪弘道、元特捜副部長佐賀元明による犯人隠避事件は、今や「特捜部廃止論」が射程距離に。まさに、司法の根幹を揺るがす大問題だ。ちなみに、この騒動によって今年の司法試験に合格し、晴れて新64期司法修習生になった諸君の検事志望者は激減しているらしい。

これから始まる公判で大坪・佐賀両被告人は否認を貫き通すとしたうえ、大弁護団が結成されたから、検事対元検事の

対決の他、同期や教え子たちを含む多くの弁護士たちの血みどろの法廷闘争が見モノだ。ところで、前田容疑者が語った「FDに時限爆弾を仕掛けた」とは、一体いかなる意味？そんな疑問も含めて、まさかこの公判で「華麗なるアリバイ」が主張されることはないだろうが、あっと驚く「何か」が出てくる可能性はある。大阪地検特捜部はどこへいくのか？そんな「国のかたち」をめぐる議論と共に、公判の成り行きに注目したい。

2010(平成22)年10月28日記